回　　覧

続 学校点描

数度の寒波に見舞われた厳しい２月でした。厳しい冬を超えたからこそ温かな春を期待せずにはいられません。

《最上町立最上中学校》

NO.20　　R7. 3. 10

担当：校長

２月26日（水）、１・２年生を対象にキャリア教育の一環として『ゆめ講話』を開催しました。

地域の方々を講師としてお招きし、自分のライフプランを考えるきっかけづくりとなる貴重な時間となりました。ご講話いただいたのは、長沢大輔さん、山﨑香菜子さん、赤川健一さん、大沼寿彦さん、小野貴之さん、宮本浩さん、栗林浩子さん、今橋知幸さん・理砂さん、須貝康幸さん、佐藤正市さん、阿部有希さんです。それぞれの人生の選択や経験に基づいたお話は、どれも心に響くものでした。例えば、マッシュルーム栽培に携わる長沢さんは、「人は興味のあるフィルターを通して物事を見ている」という視点を語られ、今橋ご夫妻は、茨城県からこの地へ移住した経緯や、人生のさまざまな岐路についてお話しくださいました。講師の皆さんの多様な視点に触れることで、今後生徒たちが何を考えるのか、とても楽しみです。ご協力いただいたことに心から感謝申し上げます。

フィルターを通して映るもの

朝早く、玄関を開けると雪が積もっていました。ちょうど新聞配達の人が来たので受け取ると、広告の中に『心のホッチキス・ストーリー』の文字が目に入りました。

文具メーカーのマックス株式会社は、毎年『心のホッチキス・ストーリー』を募集しています。そこには「今の幸せ」「家族の絆」「友だちとの思い出」など、何気ない日常の中でいつまでも心にとどめておきたい思いや出来事を綴るとあります。

入賞作品のひとつに、こんな話がありました。

私が小学生の頃、夜ご飯の前に父と喧嘩をしました。嫌いなメニューだった私は不機嫌になり、そんな態度を見た父は「もうお前に食べさせるものはない」と言って、私の皿を取り上げました。ムキになった私は、何も食べずに部屋へこもりました。

それから一時間ほど、ベッドの上でぼーっとしていました。お腹は空いていたけれど、今さらリビングに戻ったら父がいるし、何より自分のプライドが許しません。天井を眺めながら「お腹すいたな……」と考えていたそのとき、母が盆を持って部屋に入ってきました。そこには、大きなおにぎりが二つ乗っていました。

「なにこれ？」と聞くと、母は笑いながら言いました。
「お父さんが、なつのために握ったのよ。お腹空いてるんじゃないかって、心配しながら作ってたよ。」

空腹だった私は、あっという間にそのおにぎりを平らげま

した。具の入っていない、ただの塩むすび。それなのに、今まで食べたどんな料理よりもおいしく感じました。

「お皿を片付けるついでに、父に謝ろう」と思い、リビングへ向かいました。しかし、父の姿はありません。母に居場所を尋ねると、「とっくに寝たよ」とのことでした。

寝室のドアを開けると、父はすでに布団の中。私は「謝るのは明日でいいや」と思い、部屋を出ようとしたそのとき。

父が背中を向けたまま、「お腹いっぱいになったか？」と聞いてきました。

私は「おいしかったよ」とだけ答え、ドアを閉めました。その直後、父はいびきをかいて眠り始めました。

「ごめんなさい」とは言えなかったけれど、あのおにぎりは十分すぎるほどの仲直りの証でした。

あの時よりもおいしいおにぎりを、私はまだ知りません。

第14回マックス賞　　なつむさん（神奈川県 / 16歳）

新聞を片手に家へ戻ろうとしたとき、向かいの家のドアが開きました。出てきたのは、出勤前のコート姿の若い女性。彼女は周囲の雪を見て、スコップを手にし、小さくため息をつきました。しかし、ふと車の周りに目を向けると、そこだけ雪がきれいに片付けられていることに気づきました。驚いたように家の中へ振り返り、「お母さん？」と声をかけると、奥から優しい声が響いてきました。

「今日だけよ」

確かに車の周りには、長靴の跡がたくさん残っていました。

“家族の絆”のフィルターで見れば、小さな出来事も胸を打つ情景に映るのです。

きりとり

ご意見・ご感想をお願いします。

今年度も、たくさんの出会いや出来事がありました。それぞれの心の中に、どんな「ホッチキス・ストーリー」が留められたでしょうか。この号をもちまして、今年度のたよりを締めくくらせていただきます。お読みいただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。